

絵本“Mørkebarnet”的魅力に迫る

デンマーク語専攻 栗林利佳

目次

1. はじめに
 - 1.1. 研究目的
 - 1.2. 研究方法
 - 1.3. 各節の内容概要
2. 作品概要
 - 2.1. 作品について
 - 2.2. 作家 Cecilie Eken について
 - 2.3. あらすじ
 - 2.4. 登場人物
3. 作品分析
 - 3.1. 形式について
 - 3.2. 言葉の選択、表現について
 - 3.3. Malene Reynolds Laugesen によるイラストについて
4. まとめ
5. 参考文献・インターネット資料

要約

今回取り扱う *Mørkebarnet* という絵本は、可愛らしく、どこか不思議な幼児向けの絵本としても扱えるが、大人が読むとイラストの雰囲気とは一変、子供たちが抱える心の闇を扱っているということが分かるだろう。また内容だけでなく、形式や言葉の選択、イラストの一つ一つに、一度目を通すだけでは読み解き難い多くの工夫がなされている。本稿では絵本 *Mørkebarnet* の魅力を、作者の人物像、作中に用いられている技法、イラストの3つの観点から分析し、筆者なりの考察を論じる。

絵本 *Mørkebarnet* は2007年、デンマークの現代絵本作家 Cecilie Eken によって出版され、イラストは Malene Reynolds Laugesen によって描かれる。児童文学における形式の特異性と文学的価値が認められ、数々の賞を受賞している。

作者 Cecilie Eken は1970年デンマークに生まれ、コペンハーゲン郊外のホルテで育つ。2003年からは自分の会社を持ち、ホルテに戻って生活をしている。1900年代よりその形式の特異性が希少となった「韻を踏んだ子供向け作品」の制作者として、世界中で注目されている。また小学校でワークショップを開くなど子供の文学教育にも力を入れている。

物語のあらすじであるが、*Mørkebarnet* は両親に見捨てられたみすぼらしい容姿の暗い女の子と、対照的に両親に可愛がられ、清楚で愛らしい姿の明るい女の子の話である。ある事件をきっかけに暗い子供が明るい子供の心の痛みに気付き、最終的に二人は一人の子供となる。つまりこの物語は、一人の子供の暗い面と明るい面をそれぞれ一人の子供として描いたものである。

次にこの絵本の形式についてであるが、*Mørkebarnet* には「ソネット形式」という技法が用いられている。ソネットとは14行から成る定型詩のこと、「小さな歌」という意味を示す。元々は子供向け作品のために作成されたが、現代に至るまでこの形式を用いた児童文学はほぼ出版されていなかった。本作では、このソネット形式の詩をさらに集大成化した「円環ソネット形式」が用いられており、行の最後には押韻が起用されている。単語を発音する際のリズムの調整によって詩に音楽性を持たせることは、読者の感情移入に大きな役割を果たすと考えられる。ではなぜ Eken が *Mørkebarnet* にソネット形式を用いたかであるが、筆者は次のような仮説を立てた。ソネット形式の非常に「緻密」でありながら「単純」な形式であるところが、*Mørkebarnet* が秘めるメッセージの「緻密さ」と「単純さ」に通じているからということである。そして円環ソネット形式の「一つのソネットの最後の行は、次のソネットの1行目と同じでなければならない」という規則は、人間のそのような成長過程が世代を超えて循環していることを表しているのかもしれないと思った。この作品を深く理解する上でやはり真実を確かめたいと思い作者に直接連絡を取ったところ、主な理由は作品のオリジナリティに重点を置いたとのことで、筆者が立てた仮説の理由によって、この物語と円環ソネットの形式がしっくりきたとのことであった。

次に言葉の選択であるが、本作に描写されている言葉の中には、タイトルをはじめ、一見対極的な言葉の組み合わせ、あるいは逆説的とも取れるような形容表現が多

く起用されている。そのような独特な言葉の組み合わせを生み出すことによってどこか奇妙で不思議な世界観を創出し、読者をよりファンタジーの世界に引き込みやすくなってしまったのかもしれない。次にこの作品には「光と闇」「太陽と月」「愛と憎しみ」など、コントラストとなる二つものが描かれていることが多い。これは、全ての物事には対極にあるものがペアとなって存在するが、それら二つは、お互いが存在しうるための前提条件であることを表していると考えられる。つまりこのことは、暗い子供と明るい子供が単体では存在し得ないことを強調しているのではないかと考えられる。さらにこの物語は宗教的観念からも読み解くことができる。文中には聖書に登場する様々な植物が用いられており、それぞれの場面で登場人物の感情にイエスキリストの人生における悲しみや慈しみが反映されている。またこの物語の舞台は天国のような庭であると描かれており、本作 *Mørkebarnet* で暗い子供が自らの善の部分と悪の部分を認識する過程は「エデンの園」を想起させる。この他にも、物語の状況によって、穏やかな場面では発音のしやすい単語が、激しい場面では濁音を含む単語が選択されたりするなど、読者が声に出して読む際に雰囲気が出るような工夫もなされている。

次にイラストの考察であるが、この作品の絵はどのページも様々なアングルから描かれており、読者の視線を様々な高さに固定することによって、このページではどの登場人物の目線に合わせてほしいのか、どの登場人物に感情移入すべきかということが分かりやすく表現されている。またこの絵本には動物や植物、遊具に溢れる庭や、おもちゃが散乱する子供部屋などの様子が非常に細かく描かれているのだが、そこには Laugesen の遊び心による多くの細工がなされている。まず、一冊を通して「光と闇」の二つの要素を表現した小物が非常に多く散りばめられている。さらに明るい子供の部屋には相応しくない、男の子向けのおもちゃや絵などが描かれている。これらのイラストから考えられる事は、相手に憧れていたのは暗い子供だけではなく、実は明るい子供も自分にはない強さを持つ子供に対して、以前から憧れの気持ちを持っていたのかもしれないということである。このように *Mørkebarnet* は文章だけでなく、イラストからも読み解くことができる作品と言えるであろう。

この論文を執筆していて筆者が最も魅力的に感じた事は、絵本 *Mørkebarnet* は作者 Cecilie Eken の「文学を楽しむことに対する意識」がかなり強く表れた作品であるということである。形式や言葉選びなど、Eken 自身が文学の持つ可能性を存分に楽しんでいるように感じられた。おそらく Eken の考える文学の面白さとは「文章にオリジナリティを持った独自の形式を使用することで生まれる様々な効果を用いて、ファンタジーの世界をより奥深く表現すること」であり、想像を膨らまして考え方の幅を広げた上で様々な問題を対処していく力を身に付けることこそが、現代を生きる子供たちにとって重要だと考えたのではないだろうか。Eken はこの *Mørkebarnet* という作品を通して、「物語の内容」と「文学的用法」の2方向から、子供の想像力を育て、文学の面白さを伝えたかったのだろう。